

選考をふりかえって

「エッセイ部門」中学生の部 選考長 林 真理子

最優秀賞となった加納怜さんの作品には、本当に感心しました。

中学生にとつて、政治的なことがらをエッセイに書くというのはとても難しいことです。けれどもとても大切なこと。

ふつうニュースや新聞で読んだそのままの、頭でっかちなものになってしまいません。しかし、加納さんは遠くから来ました。実際に自分が目にしたものから考え始めます。

初めて訪れた香港、そこで加納さんはデモをする若者たちの姿に、深く心をうたれました。中には自分とそう変わらないような年齢の少年もいます。そして加納さんはかつての香港が植民地だったことや、日本の若者たちへと思いがいくのです。エッセイを書くときに、こういう風に「思いがいく」というのは、いちばん重要なこと。そして加納さんは、彼らの「黒」を発見します。自分だけの発見、自分だけの言葉、加納さんはこれを手に入れましたね。

優秀賞の「一等地の卵焼き」は本当に楽しい。こんな風に日常を面白くいきいきと書けるのは、奥野里奈さんがすぐれた観察眼を持っているからでしょう。エアコンがある「一等地」なんて、素敵な表現です。そしてこのエッセイのいちばんすぐれているところはリズム。関西弁が非常にうまく使われています。田辺聖子先生も、こうした関西弁を使ったエッセイや小説の名手でした。それと、お母さん元氣になられてよかったですね。

中村拓真さんのエッセイ「美しくないからやめなさい」は、お母さんの口癖、「美しくないからやめなさい」をテーマにしたものです。現代人の必需品、学生にとつては生命線ともいえるスマホに夢中になっていると、お母さんにこれを言われる。勉強しなさい、目が悪くなる、ではなく、美しい姿勢について言うおかあさん。素晴らしいです。美意識という宝ものを教えてくれました。